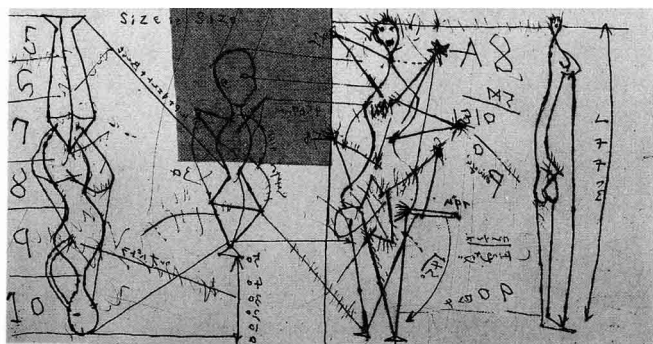


吉行淳之介 自家^{じ か きん せい}謹製 小説読本

山本容朗＝編



有楽出版社発行 ● 実業之日本社発売

吉行淳之介

自家謹製 小説読本

昭和63年5月25日 初版発行

著 者 吉行淳之介

編 者 山本 容朗

発行者 峯島 正行

発行所 有楽出版社

〒104 東京都中央区銀座2-4-2

誠佳ビル6階

電話 03 (567) 3784

発売所 実業之日本社

本社 〒104 東京都中央区銀座1-3-9

電話 03(535)4441 振替 東京 1-326

支局 大阪市北区曽根崎2-12-7

梅田第一ビル

電話 06(312)1573

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 共文堂製本所

乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。

© J. Yoshiyuki 1988 Printed in Japan

ISBN4-408-59026-6

目次

I 小説の書き方

利休鼠の雨 7

「祭礼の日」から三十年 9

メモの切れ端 13

「皿の苺」と入れ歯 15

野間賞受賞の挨拶 18

ダダ雑感 20

身辺雑記 24

軀 27

私の文章修業 29

石膏色と赤 33

綴方について 37

ある種の晩年意識 39

童謡と私 44

作品と制作プロセス 50

私の書きたい女 53

文学を志す 55

偶然について 61

ある作品 63

ある設定 67

小説の処方箋 77

Ⅱ 対談

夢・鏡・迷路——種村季弘 83

女について——田久保英夫 107

Ⅲ 小説の鑑賞法

幾つかの「一冊の本」 151

「遷東綺譚」を読む 161

森茉莉「薔薇くい姫」など 167

田中小実昌氏を推す（第十五回谷崎賞選評）

174

色川武大『怪しい来客簿』推薦 176

深夜の妄想 177

「死の棘」を読む 181

好きな詩 184

「瘋癲老人日記」を読む 188

小川国夫氏のこと 193

「狂才」筒井康隆 196

「陰翳礼讃」を読む 201

テリエ館 205

「世紀末」と「明治人間」 211

川端康成の「みづうみ」 223

『てろてろ』をめぐって 224

「つゆのあとさき」雑感 226

永井龍男の文章 229

「老茄子」「裾野」を読む 232

柴田錬三郎『桜田門』『さかだち』評 235

営業方針について 237

あとがき——この本の読み方 242

I 小説の書き方

利休鼠の雨

これまで、私は作品の中に具体的な地名を出したことは、一、二の例外があるにすぎない。読者が勝手にきめてくれれば、かえってリアリティが生じてくる、とおもっていることもその理由の一つである。ただ、書いているときには、私が自分好みの場所を頭に置いていることが多い。「夕暮まで」の冒頭の一章は、夢であり幻である。したがって、ますますどう書いてもいいわけだが、城が島の橋を渡り切った先にある崖の上の公園を頭に置いた。その城が島には、二十年近く前、一度行っただけである。作品のようにバスで行ったわけではなく、運転していった。急勾配の狭い坂を下ると、魚くさい小さな港があり、坂の上のほうの大きな橋を渡ると人気ひとけのない公園があり、そのコントラストがきわめて印象深かった。

もう、そのくらいしか覚えていない。年月が、その風景を変えていくかもしれない。それなのに、この場所が印象に残っているのは、やはりあの北原白秋の歌、「城が島の雨」が心に残っているためだろう。

いまその歌を読んでみたが、その第三節以下は知らなかった。なにやら、この作品と、奇妙な一致があるので、おもしろくおもった。全文引用は厄介な制約があるので、

利休鼠りきゅうねずみの

雨がふる

という二行だけを出す、この「利休鼠」が長年の疑問であつた。今回念のために辞書にあたってみると、あつけなく解決した。「利休」とは、染色の呼び名の一つで、「緑がかつた灰色」とあつた。「利休鼠」とは、みどりがかつたねずみ色のことである。

この一章で、私は公園の地面から数メートルだけ「薄紫色がみなぎっている空間」をつくつてみたが、これは城が島に身を置いたときのきわめて主観的な印象である。むしろ、つくり話といつたほうがよく、そのときには、「利休鼠」はねずみの一種かとおもつていた。

(昭和五十五年十一月)

「祭礼の日」から三十年

はじめて「文学界」に掲載になったのは、昭和二十八年二月号の「祭礼の日」という三十枚足らずの短篇である。私は二十八歳で、当時の自分としては、もはや若いとはいえない気分だった。それにしても、しかるべき文芸誌に作品が載るのは芽出たいことだったが、そうもいつておれない事情があった。二十七年の秋の終りに、肺の空洞が発見されて、安静を言い渡され、手術したものかどうか、迷っているところだった。ま、そういう不景気な話はやめにして、この短篇にまつわる思い出をすこし書く。

これは、私の好きな作品だが、やはり体力の不足のせいか、小品という感じのものになった。この「祭礼」とは、靖国神社の祭のことだが、市ヶ谷界隈で育った私にとっては、この祭は馴染みのもので、その期間には何度も出かけたものだ。参拝というよりも、境内に並ぶ見世物小屋や露店のほうに足を向けるのである。この作品はぼぼつくり話だが、ディテールに幾つか実際のものを使った。少年時代の「ぼく」の隣家に若い美しい夫人がいて、そのアンニュイな感じに惹かれた、というところからはじまるわけだが、その夫人は架空の存在である。ただし、夫人の幼い娘の言動については、妹の理恵子のことを使った。その娘は、色の褪せた赤いポストを指して、「ポストが枯れてる」と言ったり、穴のあいた靴下をはいて「イタイ、イタイ」と泣くので、ふしぎにおもっていると「靴下が痛いおもいをしている」ということで泣いていたりする。この部

分に、こういう文章がある。

『そのときのぼくは、幼い娘の奇異な言動の理由については考えようとせずに、その娘がふだん猫を病的に可愛がることなど思い出して、「この娘は大きくなったら、どんな恋をするのだろうか」と、ぼんやり考えていた』

この妹は何年か経って詩を書きはじめ、やがて小説も書くようになった理恵（つまり、本名は理恵子）であるが、当時は十四歳だった。今の本人を見ていると考えられないくらいなのだが、私たち三人兄妹のうち一人だけアレルギー体質と無縁の健康優良児で、幼いころは餓鬼大将だった。赤ん坊のときには、「這う」という時期がなく、歩きはじめる寸前は、尻に滑車がついているように、坐ったまま凄いスピードで畳の上を走りまわっていた。

十四歳ごろも生意気、というか、大人が本気で腹を立てるようなことばかり言うので、毎日のように喧嘩していた。三十近い男が十五年下の妹に、本気で腹を立てているのにふと気づいて、滑稽な気分になるときがあった。そして、しばしば牧野信一の「泉岳寺附近」という短篇をおもい出した。この作品には、主人公の中年男が、小学五年生を相手にハサミ将棋をして、さんざん毒舌を浴びせられ、あげくに負かされる。ついには本気になって、悪ガキの頭をボカリとやるところがある。

『ところが私は、二番、三番と忽ちのうちに敗北した。余程注意の念を凝らしているつもりでも、つい私は、ふと他の妄想に走ったり、のべつまくしたてる守吉の駄弁に煩わされたりして、くだらぬところでいち時に三つもはさまれてしまうのであった。

「もう一番！」

私は思わず膝を乗り出して挑戦した。

「飛んで灯に入る夏の虫——とは手前えのことだ。さあ、寄れ、寄らば一刀両断で——」

口癖となつてゐる芝居の科白を滑脱にまくしたてるのだが、次第に私は、それらの科白までが小癪に觸つて堪らなくなつた。

「こう来る、ああ来る——か、ふふん、太え了簡だ、この田舎っぺが！　そう来りや、こう逃げ——」

彼は潜航艇の真似などをして、飛鳥の如く駒を翻すので、私は唇を噛んで追跡にかかつてゐるうちに、

「さあ、どうだ、思い知ったか！」

彼は、突然げらげらと笑い出すのだ』

途中、あちこち省略して引用したが、小僧らしさはよく出ている。ハサミ将棋というところが愉快だ。ついに、主人公は守吉の頭をボカリと殴ることになる。

さすがに私は理恵の頭をボカリとやりはしなかつたが、言い負かされる、という感じはいつも残つた。したがって、「祭礼の日」に出てくる幼女のような感じは受けていなかった筈で、だいた理恵が幼いころ猫好きだったかどうかも、よく思い出せない。いや、臆げに思い出したことがある。近所に建築中の家があつて、そこに棲みついた猫一族のことが気に入って、しばしば餌など運んでゐたような気がする。

数年後に書いた隨筆にも、猫好きの少女が出てくる。これは、いくぶん妹を念頭に置いていて、『こういう少女が大人になったら、結婚しないで、猫ばかりたくさん集めて暮すのではあるまいか』というような文章が出てくる。しかし、これは予言するというような気持はまったくなくて、筆の勢でそう書いたようなものだ。しかし、現実私の書いたとおりになってきて、この意外

に呆れている。

「祭礼の日」を書いたのは、芥川賞の三度目の候補になって落選したところだった。それから長いような短かいような歳月が経った。自分がその賞の選考委員になり、妹の「猫小説」が候補作になって受賞するなど、夢想もできないことだった。

（昭和五十八年十一月）

メモの切れ端

ヒキダシの奥から、メモのようなものが出てきた。原稿用紙の裏表に雑然と文字を書き並べてある。

「身ノ上相談ヲ受ケル。打出ノ小槌ガスコシモ減ラナイノデ困ッテイルノデスガ、ドウシタライイカ、ト聞カレル。ソナコトヲタズネラレテモコマル」

などと書いてある。どうやら夢をメモしたものらしいが、いつごろの紙きれだろう、とおもっているうちに、

「新築ノ立派ナビルニ入ッテ、エレベーターニ乗ル。百トイウボタンガーツアルダケデ、困ル。ソノボタンヲ押スト、エレベーターガ動キ出ス。ヤガテ、ドアガ開クト、ソコハ入レコミ座敷風ノトコロデ、タクサンノ人タチガ鮫鱈鍋ヲツツイテイル」

という文字があった。

これで、昭和五十三年ごろのメモと分った。なぜなら、そのメモを使って『酔っぱらい読本』のあとがきを書いていて、その第三巻の発行が五十四年一月であるからだ。

「盲腸ガ痛ンデイル。中曽根康弘ガ白衣ヲ着テ、手術ヲシタガッテイル。トテモ困ル。コトワルニハ勇氣ガイル」

この夢はよく思い出せない。昭和五十三年の中曽根康弘氏はどういう立場にあったのかも思い

出せない。ただ、あの人は体格が良いわりに胸のところが窪んでいるようにさびしく、白衣がエモン掛けにかかった感じになって、腕の悪い外科医に見えそうだ。こういう場合、患者としては、「先生は腕が悪そうだから、ほかのドクターにしてもらいたい」とは言えず、困ったのかもしれない。

「タクシーニ乗ル。運転手が女デ、コチラノ指示シタ行先トハチガウトコロヘ、ドンドン連レテ行ッテシマッタ。着イタトコロハ、彼女ノ家デ、ナカカラ昔ハサゾキレイダッタトオモワレル母親ガ出テキテ、『娘ヲヨロシク』ト言イナガラ、ジットコチラヲ見ツメテイル。コワカッタ」というのも、ある。

「一〇番ニデンワスルトキ、ダイヤル式電話器ノゼロハモトノ位置ニ戻ルマデ時間ガカッテ、ツナガルノガ遅レル。ナゼ一〇番ニシナカッタノダロウ。タクシーノ中デソウ言ウト、運転手が振り向イテ、『ソレハオ客サン、人間ガマダ車ニ馴レテイナカッタセイナンデスヨ』トイイ、ハナシガワカラナクナル」

そんなのもあり、また、こういうメモもあった。

「ヤクザニ脅迫サレテ、七万円ズツ二度取ラレタ。ソナニ取ラレテハ困ルノデ、二度目ニハ値切ル。ナゼ七万円カ。最初ノ七万円ハワカッテイル」

この七万円という数字に関しては、そのときからさらに十五年ほどさかのぼった時期の記憶がからまっている。ただし、ヤクザとは無関係の事柄である。

それにしても、困ッタ、コワイ、という夢ばかりである。

（昭和五十八年七月）